

■羽田盃 (SI) アラカルト (過去全 66 回の分析)

※第 1 回 (昭和 31 年) から第 8 回 (昭和 38 年) までは「大井杯競走」の名称で実施

※第 1 回 (昭和 31 年) から第 11 回 (昭和 41 年) までは 1,800m で実施

※第 12 回 (昭和 42 年) から第 40 回 (平成 7 年) までは 2,000m で実施

※第 41 回 (平成 8 年) から第 43 回 (平成 10 年) までは 1,800m で実施

※第 44 回 (平成 11 年) から第 46 回 (平成 13 年) までは 1,600m で実施

※第 47 回 (平成 14 年) から第 48 回 (平成 15 年) までは 1,790m で実施

※第 19 回 (昭和 49 年)、第 57 回 (平成 24 年) は 2 頭が 3 着同着

※記録は令和 4 年 4 月 28 日時点

■ 2 番人気以内の馬は堅実

単勝 1 番人気馬は 30 勝、2 着 8 回、3 着 6 回で、3 着内率が 66.7%、単勝 2 番人気馬は 24 勝、2 着 18 回、3 着 7 回で、3 着内率が 74.2%、単勝 3 番人気馬は 3 勝、2 着 14 回、3 着 16 回で、3 着内率が 50.0%となっている。上位人気に推された馬、特に単勝 1~2 番人気馬の活躍が目立つレースだ。

■ ちょうど半数の回で 3 番人気以内の 2 頭がワンツー

過去 66 回のうち 57 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。また、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツーフィニッシュ決着は 33 回、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は 15 回ある。

■ “無敗”で優勝を果たした馬は 6 頭

2 着以下に敗れた経験がない馬の優勝例は、第 27 回 (昭和 57 年) のホスピタリティ (7 戦 7 勝)、第 32 回 (昭和 62 年) のシナノデービス (4 戦 4 勝)、第 38 回 (平成 5 年) のブルーファミリー (6 戦 6 勝)、第 42 回 (平成 9 年) のキャニオンロマン (4 戦 4 勝)、第 45 回 (平成 12 年) のイエローパワー (3 戦 3 勝)、第 46 回 (平成 13 年) のトーシンブリザード (4 戦 4 勝) と、これまでに 6 回ある。

■牝馬は5勝、外国産馬は1勝

牝馬の優勝例は、第4回（昭和34年）のハルセキト、第26回（昭和56年）のコーナンルビー、第34回（平成元年）のロジータ、第37回（平成4年）のカシワズプリンセス、第56回（平成23年）のクラベセクレタと、これまでに5回ある。なお、外国産馬の優勝例は、第50回（平成17年）のシーチャリオットのみだ。

■的場文男騎手は歴代最多勝まであと1勝

騎手別の勝利数を見ると、7勝の赤間清松騎手が単独トップ。的場文男騎手が6勝で単独2位、石崎隆之騎手が4勝で単独3位となっている。

■調教師別の歴代最多勝記録は「7」

調教師別の勝利数を見ると、出川己代造調教師が7勝で単独トップ、川島正行調教師が4勝で単独2位、竹内美喜男調教師、矢野義幸調教師が3勝で3位タイとなっている。

■3枠ほか中心寄りの枠番が優勢

枠番別勝利数を見ると、3枠（16勝）が単独トップ。5枠（11勝）が単独2位、6枠（10勝）が単独3位となっている。また、馬番別勝利数を見ると、3番（10勝）が単独トップ。4番（7勝）が単独2位、7番、9番、10番（各6勝）が3位タイだ。なお、未勝利の馬番はないが、2番、13番、14番、15番、16番はそれぞれ1勝ずつにとどまっている。